

AIST 技術移転ショウケース 2002

産学官連携部門 知的財産部 竹之内 秀明

5月30日、東京九段下の日刊工業新聞社7階ホールにおいて産総研主催、(財)日本産業技術振興協会、産総研イノベーションズ、日刊工業新聞社の共催で“AIST技術移転ショウケース2002”が開催されました。この催しは、産総研の保有する技術に関して、国内外の企業の関心を高めること、および具体的な技術移転のための商談を行うことを目的として催されました。今回はテーマを“Human Information Technology”に絞り、技術の紹介、試作品のデモンストレーション、産総研イノベーションズによる技術移転商談、産総研特許の紹介を行いました。企業からの参加者は約200名で、商談コーナーでは特定技術に興味ある企業や、技術移転の手続きについて知りたい企業等により、開催時間中、熱心な相談者が絶えることなく次々とブースを訪れ商談が行われました。

当日は、主催者側から吉川産総研理事長、日刊工業新聞社菅野取締役社長の開催の挨拶で始まり、続いて池上産総研理事が‘ショウケース’の概要について説明を行いました。

●主催者挨拶から●

日刊工業新聞社 取締役社長 菅野 泰平

今回のショウケースにより、産業技術総合研究所の高い技術が民間に移転し、ビジネスに活用され、日本の産業力の強化につながることを期待いたします。

産総研理事長 吉川 弘之

昨年4月独立行政法人となり、様々の改革を行いましたが、産業に対していかに貢献するのが最大の課題になりました。産総研に生まれた技術知識は技術移転という形で産業に使われなければなりません。使われることが非常に大切です。

産総研では、特許ポリシーを作成し、全研究者、全所員が徹底して認識するという方針をとっています。また、技術移転のための組織変革を行いました。

研究論文も必要ですが、それと同時に多くの特許取得が大切です。そしてそれを技術移転することが大切です。



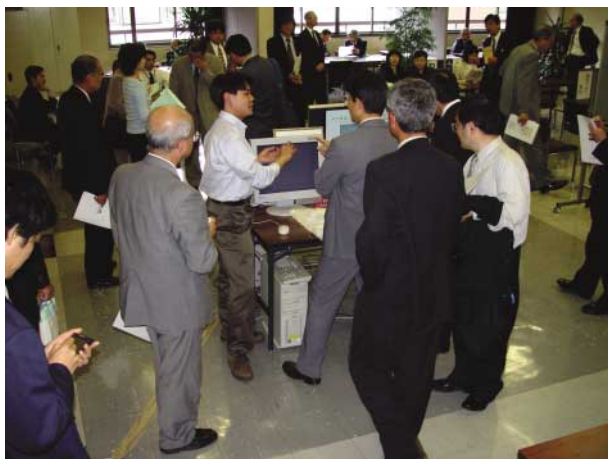
産総研の各研究ユニットでは、基礎研究をするグループ、基礎研究を使える技術へと展開するグループ、技術移転のため研究をするグループにより一貫性のある研究を行い、産業界の一步手前の技術にまで育て上げるというを行います。

今回は、産業に使っていただく技術を用意いたしました。

●ショウケース概要説明から●

産総研理事 池上 徹彦

ビジネスショー、エキシビションというと、米国等では青空市場のような感覚、買い手と売り手により値段が決定するものですが、これまで日本においては技術の紹介がメインでした。今回のイベントは、新しいモデルの挑戦であると考えています。ぜひ、参加するという意識で、いろいろ意見を聞かせて頂きたいと思います。



技術紹介リスト

(1) 「ビデオからの実時間ジェスチャ認識」	サイバーアシスト研究センター客員研究員 (会津大学教授) 岡隆一
(2) 「ボリュームグラフィックス (VG) クラスタによる高並列ビジュアルコンピューティング」	脳神経情報研究部門 ボリュームグラフィックス連携研究体 連携研究体長 村木茂
(3) 「MRI画像をカラー化する方法」	脳神経情報研究部門 ボリュームグラフィックス連携研究体 連携研究体長 村木茂
(4) 「顕微鏡下微細操作のための全焦点顕微鏡カメラ」	企画本部企画主幹 大場光太郎
(5) 「ブロック共重合ポリイミドを用いた超高速回路」	光技術研究部門 光電子制御デバイスグループ 主任研究員 板谷太郎
(6) 「進化型ハードウェア」	次世代半導体研究センター 研究チーム長 樋口哲也
(7) 「ポータブルマニピュレーションロボット技術」	知能システム研究部門 タスク・インテリジェンス研究グループ 研究員 齋藤史倫
(8) 「ネットワークを渡り歩けるコンピュータ」	情報処理研究部門 主任研究員 須崎有康
(9) 「意味構造を用いた検索システム」	サイバーアシスト研究センター 副研究センター長 橋田浩一
(10) 「ユビキタス面触覚センサ」	知能システム研究部門 人間共存システム研究グループ 主任研究員 柴田崇徳

問い合わせは

産業技術総合研究所 知的財産部知的財産企画室 TEL 0298-61-3284

●産総研の知的財産権公開システム (<http://www.aist.go.jp/aist-idea/>)

産総研イノベーションズ TEL 0298-61-9232